繪本甲越軍記三編

十

2258
34

門へ逆13
特2258
巻34

池清

繪本甲越軍記三編巻之十

目録

甑尻合戦之事
山岡八郎綱宗之図
武田上杉和義成らざる事
同図
山本道鬼練言之事
同図
上杉謙信伝州放火之事

甲越軍を交る図
上杉謙信上洛之事
武田下総守恥辱を取図
上杉勢相州乱入小糸援ず武田ふせぐ事

甲越

繪本甲越軍記三編卷之十

甲越軍を交る図

第

仔

課

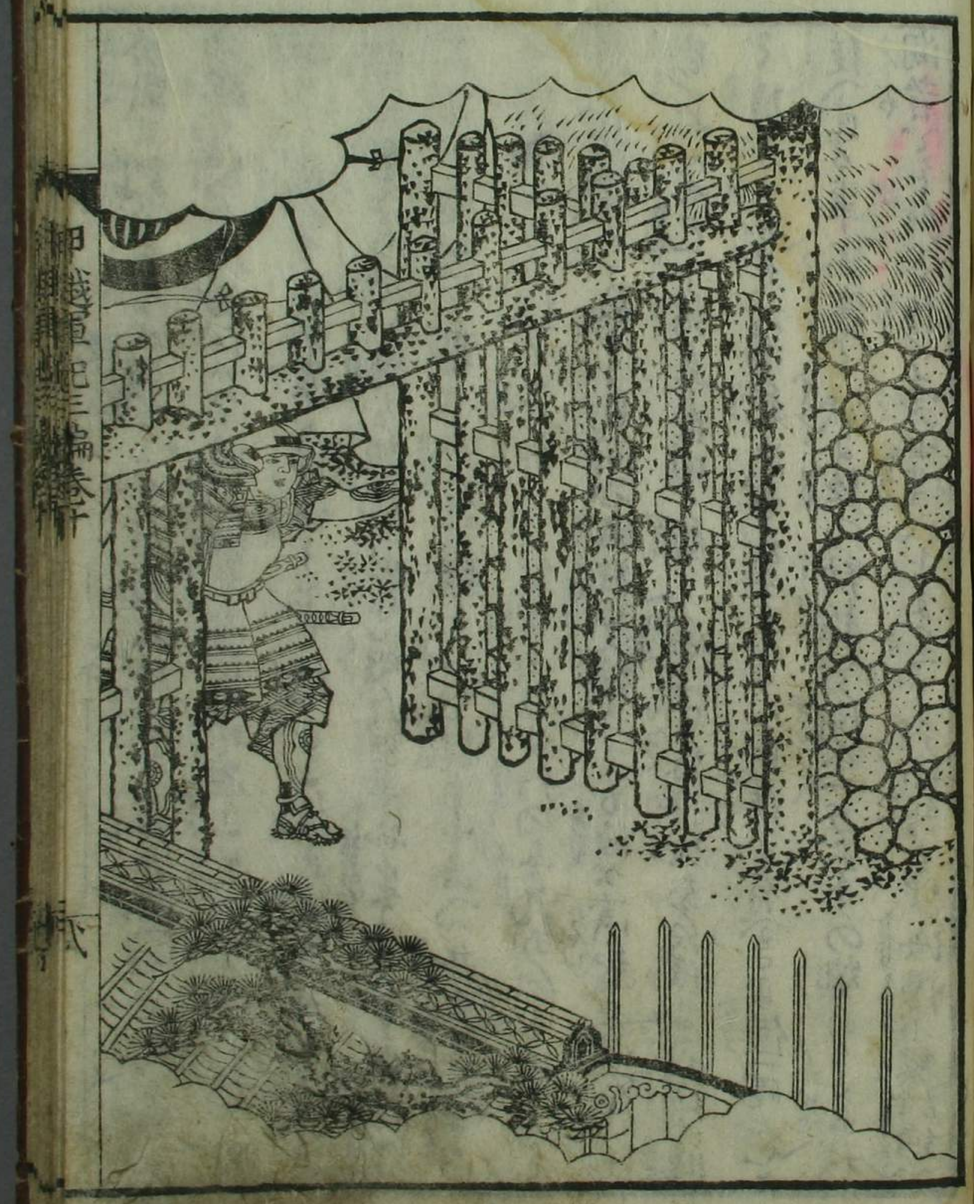
甲越軍記三編卷之十

甲越軍を交る図

甲越

×

698
甲越



山田八郎
説客の
図

合戰に到る者共撰び一万五千騎人勝敗と一挙に決せんと欲す事
の敵と慢り所向ひに勝利覺束なくは某は遅兵と授け給て其
破るべき所あり武田家は締備を以て殿を後陣は一手の兵と
備へ先づ敵を破る時は山崩れ事なりと中に信濃
る勢ら顏色を変じ尤も覩く如と掘よりいへば兵士等折重つ
く山田を押くく掘る八郎呼んでいわく我は何の妙あり掘るとも
罵る長坂大に怒り及間の紙我を染るも汝が淺智は我ぞ
嫉れんや已十餘年武田に属し俄に内緣便宜あり我は戰場に隙
ぐ侯とも是一間然るべき武士なり八郎徒士有べきは僅一両人と
徒へ事不審く紙は敵の勢靜と聞に一万五千の勢あり云我
間者とも抜き抜き僅八千は多ぐ兵士は汝慢に敵と

軽

戰兵と成人とは又締備と対人事と統共締備と越軍の要堀
奚しく汝是と欲ん人や甚上自身の合戰軍と後べは迎と
しく有べき是我兵と死地は偏に策あり奚崩に策は偏べきは
と罵れば八郎頭を低く言ど背く頭と挙策計露の人は
明白に表中さん其謂を信玄は生涯事と仕換る者と思人で再び
用ひ云れば命と全くして武田が陣は帰る共再び出る事難れ
べ実に君に属しまり及間寄計と岩て後策と対ん某が出不
らざるべ軍絶ると系と掘蟲く後罷は約るべくと云長坂
顏色は変さ掘り先紙は敵べくとあり云れば八郎僅ぐ兵士武田の
勢八千に対せども実は當方の勢六千あり別は甲兵三千餘み信
州の兵と加へ七千餘三は小分て掘る箕輪の城本城に掘る松井田

の城にて安中城と攻落せば當国の御勢も戰つゞきて
終るべしとて然と合戰を急ぐべし対陣あり三城の左右を待居は
あれば速に三城加勢を遣されん後と堅く當国の勢八短兵急に
攻難きなれば敵の緩斗を遣し信玄も対陣なん事十日八九日
は歩兵共乾の合戰の進退を君の御心に任せ孫へと
奉答奏し利害得失を演べられば長野信濃守は諸持の疑ひ先山田と
左陣小幡蚤諸大将評議あり安中・松井田一城と備られ
ても大事なり當国の勢を一万五千騎と見へしにて九千騎と多く甚痛
安中松井田を援せさせば武田の急は責て小幡金子野と先備
に天神山・大石を左備に古肥友野を右備に古京波を二陣に
長野信濃守は中陣に備へ上州の諸勢一万千騎鶴翼の備へ甲州の

先備諸角勇侍は後守の備へ鉄炮を手の内に用ひ引
色んで対敵んと勇に斗んで突て入水と成て攻る諸角小勇山
も武田勢と鉄炮を手の内に用ひ命限りと戰へども小幡金子野
の猛勢に対し難く諸角小勇山も一戦に敗て陣を引武田勢
猶追切崩されて敗走に上州勢勇を奮ひ武田義信の
手備の備へを突て重て攻る武田義信の飯富
十人衆と突倒して三度三度戰へば内藤飯富の軍勢粉粉と討死さ
せて崩し引く迫て長野長助同弟長八郎小笠山八左衛門
追来る敵西勢を切て落し四方と拂て戰ひ合て敵の勇士
深志を捨て長助と弟大力丸の陰と引志ざ紀長助同弟
長助を捨て深志の陰と生殺し猛勢のぬく付合て左右

ゲ右ヨリ胸板ヲ射ヒ通サレ突落シ是ヲトラントテ紺糸縅ノ具足ヲ
着上ノ糸ヲ右ヨリ名ノ糸ヲ出シ助ヨリ討ル者ノ遺間モ多ク戰ヒ面ヲ上ル者人
八人ヲ助ケ出ヒ叫ンデ三方ヨリ斬ル小長助更ヨリ勇氣ヲ出シ
ヒ多勢ノ強ク突ケ共ヒ長八郎是ヲトラントテ討ル共長八郎
勝ヒ多ク敵ヲ後ヨリ受ケ死物狂ヒヨ働ケバ石田
長藤八ケ時新ル郎級宣義後ヨリ長沼ヲ助ケ戰ヒ
陶義盛ヲ是ヲトラントテ馬ヲ流敵ヨ強ケ長沼ヲ討ル小字ヲ力ケ
ト字ヲ出ヒ遍寺久助ヲ形民郎左衛門ヲ本郎後河ヲ所田
京岡善上糸伊勢ヲ右尾ヲ後ヲ八木糸久保嶋ヲ長勇士
強弾一同ヲ取ヒ出シテ角ヘ上州勢ノ旗色ヲ白ク
ヒ見ヘタル取ヒ支ヒ十郎左衛門右肥大振亮三子弟等共ヒ奮テ

討ヒカヒ飯富三郎兵衛ヲ十文字ノ槍ヒ奉ヒ秘術ヒ盡シ戰ヒ
ヒ上州勢ヲ打ヒ出シ四度ヒ取ヒ返シ又ヒ
味方ヒ持ヒ討ヒ
飯富兵部少輔ガ備ヒ原
ヒ備ヒ共ヒ暮ヒ
ヒ小場金ケ砂ヒ備ヒ
来ヒ取ヒ
将ヒ
自ヒ
戰ヒ飯富民部武田ヒ助信宗ヒ
鬼ヒ敵ヒ

702 甲越

軍となり七騎八騎うちくづれ迎へ合と武田の士卒馬にうちのりくづれ歩
卒共おらんでと追蒐る長野信濃守歯噛切三間ばかりとぶ取て丸ぬき
山内三郎ばかりふ物ふんばり立て戦ふ主と捨釈と顧ず戦ふ
又紋所を土肥大膳亮友勝十郎左衛門尉味方と呼ぶ敵せんと切
掛と小揃と取て守り一命と義の為ぞ狂んで輪と傾け射回の種
とあり合色ふれとゆく血戦して結美義顧ふ信玄土肥友勝
体とうちく追蒐ぬ振うふ人数と揚られば上州勢共ちく本の
陣ぬ帰りうれば奥計人先と山本入道乃鬼戦のまぬ物と色
長野ぶ陣ぬ押寄ると追掛ひ入替〳〵戦ひ物とき擒長野ぶ
引帰うくく陣中よりの人の馬武者進〳〵出山本入道乃鬼ぬ
山内八郎とうもうこれ引ぬ紋ぬ戦ふ〳〵紋ぬ戦ふ〳〵鬼と捉で

来せうふう大音ぬ呼ばび長野信濃守馬上と頓ぬ立と蹴ぬ
一揉と揉ぬ山内厳ぬと裂ぬ〳〵と進〳〵乃ばび山内八郎一
騎〳〵ふく本戸と独入鉄炮と両の脇ぬ打出せば上州勢進ひ事独
ハざれば拳を振ぬとぶく箕輪の味方ぬ帰る

武田上杉和義成り事

長野信濃守倉ヶ野三郎小幡右と左肥大膳亮友勝十郎左衛門
同左衛門郎波多野勝盛同七郎天神山大石なると始上州の諸大勝と戦
尻の一戦と利ひ月ぬ引ぬ皆左様と揚箕輪ぬ武田入道信玄ぬ
ぬ〳〵ぬ押続〳〵上州と平均せんと長野信濃守が箕輪ぬ
様と押寄ぬ上杉謙信ぬ中国と出張の南北告ぬ〳〵箕
輪とお捨ぬ中国と出陣宵ぬ〳〵ぬと出ぬと待て戦んと対陣ぬ

703 甲越

謙信も長野ふかと合せんと出陣あるべき歟屈の戦ひ落去しかんば
長野又亟く上州武州の境と甲州へ乱入させ武田が引出さんと追討と
繰り返くども上州武田の諸将も歟屈の戦ひ力と落して長野
信信又遮せざれば謙信も力なく陣をしりぞく然後小原陣あり弘法四
年改元あり永禄元年と号し上杉入道謙信倩思慮有て
武州おほぢと平均せんふ武田と絃楯有て妨あり武田又上州
志あるふ家有てを渠が妨ちうず渠を和睦をなし
より軍を出さんと三月甲州へ使を遣し云送りを近年両家弓矢と
争ふ事偏ふ村上義清より頼れ武の一道と思ひ住止む事と得ざる
ふあり不絶此後両家和睦合戦し謙信は紙中独登加賀
志ぐべく乞又為糸が供養を使へ又上杉憲政が上州平井へ

と計らはんと有られば武田の諸将大に怒び当家の幸ひ速又
御和睦なるべしと勧るまば信玄絃緒有て又月十四日両大将和睦の
対面なるべき由ふ牛姫の渡りより四ツ所大室の方へより籠摩川
と隔て両方の川岸ふ林机と立て陣机なるべきうちより陣机ふ
一礼なるべしを為に士又人宗遣ふ人と拂ひく対面あるべしと
両家使者と為ふ約と定め脱と其日ふ至りて武田入道信玄上
杉入道謙信り端ふ馬と乗寄られ両方脱よりとんと飛び陣謙
信を宿ふ雄の勇将なれば信玄ふ周旋とうとまじとふくるふ
能ぐ乗り将机と腰とかけられ小信を鞍とゆりて左右とうんかで
下を振て苦しうしぶれ謙信ふくるを乗れ呼び強へ謙信
大に怒り頓く馬ふ乗営中ふ独居りて使者と以て申されるる

705 甲越

実史今日の安徳一向匹夫の為体にて更に大将の挙動に鎌
倉大に怪る所なり系図祖謙倉次郎景弘を植武天皇の後裔
倉掾又郎景政が曾孫にて右大将頼朝卿に眼近く仕へ数
代続く人に某に至る迄武蔵の名を呼ばれ就中平が国流桓武
平三系時に右大将家の侍所別当と称し富士野牧狩の時も桓武
系の次甚武田と云ふ事を歴然として嬰児も知る所なり
甚上八箇年系より上杉の名跡を継ぎ管領職となりて半老
の者勅傷若年人の形勢更小人倫の交りに向後手を
勅を事なき姿の如くもくべしとらい遂てまろれば信玄答て云く世
なる系図なり抑武田の宝緒の事なれば我朝に隠れなれば今
日及ぶ所なの桓武右大将家の被官なり何ぞ武田を郎信

と甚る卑と比べ人や又管領職の事なり上杉憲政武の道と元卿し
賞罰討は晴く民と貪り人此人の紛紜有天罰対其身と表く然後
迄至り冥加の尊くなる管領職と謙信が管領顔なれば
なれ信玄曾て是と宣びし丈中でもなく信玄も系くも大僧正
宮下とかされ官既は大納言は御と謙信を信玄官なり
殿は対しなんで尾張の仕方ホのん和議と彼なるは時勝
ばば何事も程度は事と紛れん事なりと五事なり
なれば猛勇武謙信を怪り要は武田入道が五事なる安くと
渠は対られ下馬しなる事なを念あれよくを以武田入
道は泡なせく此怪りと敬ぜんとく然後なで帰係なり

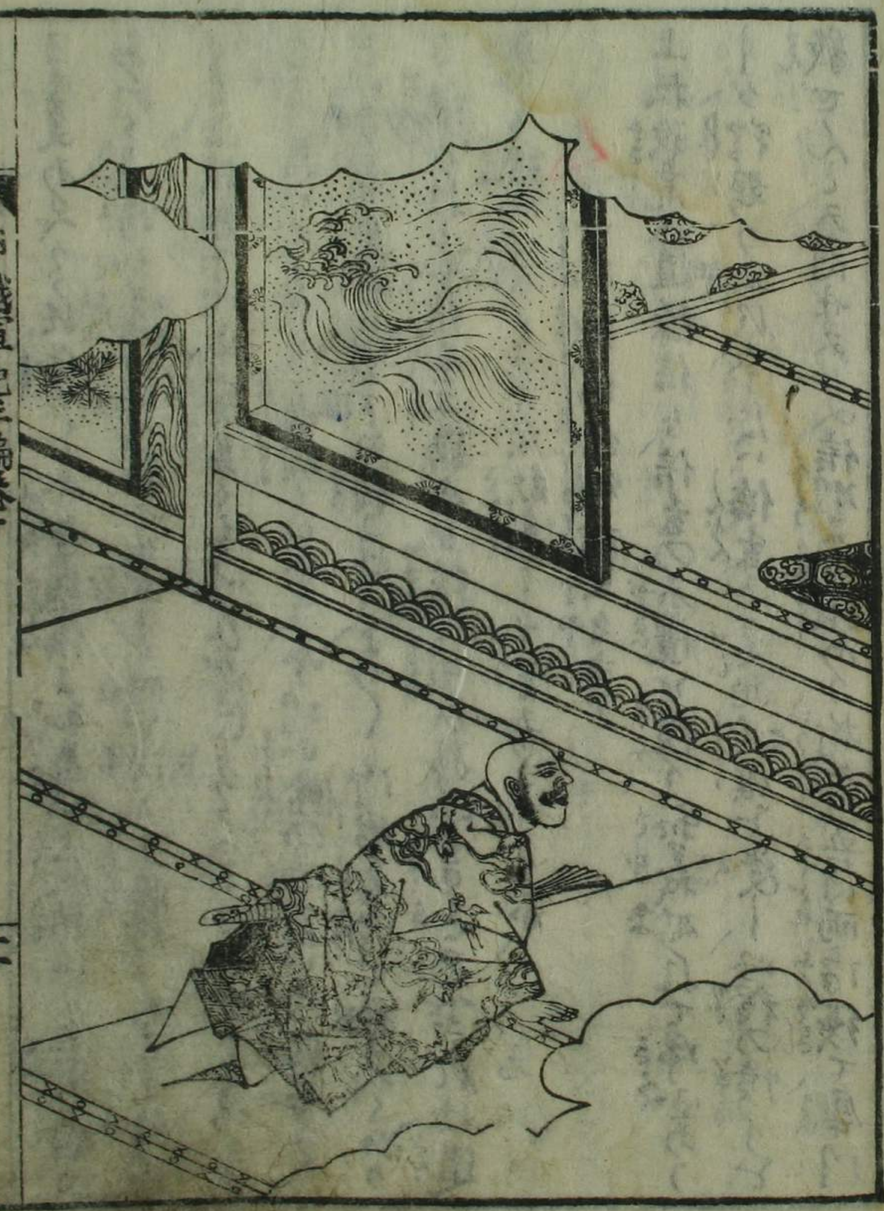
山本道鬼練言く事

将度上杉武田和義の事数年両家の緒絶る大夫憂ひ中国山本勘助入道深く謀を信玄の前に出て上杉方討向の仮君の御振舞小体謙信公腹ある事なれば君御の御思召有て和平を破り弟小四郎景虎を相続ぜしめ給ふ君御の御思召有て和平を破り弟小四郎景虎を相続ぜしめ給ふ

中せば信玄完然として各々不審なり上州と志をいれも小條に妨られて思ひ止り不小條上杉方に敗り放る上州の士と戦ひの中あれと以て我に上州を任せ既に軍を出して武威を示し今一度に上州を平均せん事無疑ふ今上杉と和睦し上州に軍を出さんに所迫で小條を我国に入れ上杉と和睦し上州に軍を出さんに所迫仕付る国を北條に攻られ人もに憐し二心ある今川義元上洛を企て天下一統の功を成ん事を謀れども後を塞ぎんと思れ我に退

と思し父信玄と謀を抜き一方を攻んが為なり此時我謙信と取合あらば其隙あらんと思ひ元亀年今川遠江小諸と数年半逢ひ引退ひ其間に討死せんも計べし況や上洛し今川より先に一統の功を成ん上州と平均し根を堅て道鬼謹ぶ中ろ君の御遠江最御策に抜いべきを玄ぶ中れば当方の御思召に恐れあらば存ぜ二心君御上洛有て一統の御志然と成ん上杉と御和睦有て京の厚く弟小四郎景虎君を迎へ御簡を堅め給ふ上杉方に後備を謙信に生贄勇勝を守る人なれば御上洛と考へ軍を出す者あり謙信に人を先に

中越 707



るゝ事あるべからずと怨ると今度謙信に恥辱を与へ給ひしかバ忿恨と
なり以後和議を調へ給ふ事ありて時を得て上洛あらんとし給ふに
ても上杉が妨をなして容易く是叶ひがたし然るべからず急に上杉を
亡し給はん事も甚だ難くはあり今川北條の両家へ御縁者なり
とは申せども偏に頼みに待には及べからず御思案有て然るべくはう
と諫められども信玄公敢て是を用ひ給ふべきにもあらず去れば道
鬼も諫の詞とどかざる故欽息して是ぞ有りける

上杉謙信信州放火之事

上杉政虎入道謙信は信玄の不禮を憤り和義破れて帰国あり
しが猶怒り止まず今度は信玄と是非雌雄を決し此程の憤りを
散ぜんと又同年又は又信州に出張あり折節五月雨降続て犀川

甲越 1708

大に水嵩増りて激浪岸を浸しけれども豊漿一同に打入て渦巻流
ぬ渉しける程に溺死する者数百人に及べども謙信事ともせず
一番にすゝむと手続て渉し給へば諸将諸卒是に励まされ難なく犀
川を打渉して川中島に陣をとり給へば信玄も頓て出張あり川中
細山に営し給ひ此度は謙信が宅を撓り不思びに烈く戦ひ
と仕懸べしとて陣を堅固に備へ猥りに用心厳敷怠りて是を制せられけ
れば名将の謙信なれば迂闊に事を給ひず七十余日対陣有て徒に
小足軽を出し縄を軍に日をぞ送りられば謙信使を信玄の陣に
遣して云けるは両家対陣に日を暮ること今度を以て程数十月にも
及べり軍勢の疲労人民の困窮を痛むに足数びは途運と一戦
に任せべし其方より川を越ゆや又此方より越て一戦を始けんや

甲越 1709

此方多くべーといひられべ信玄ゲ者くゑ甚方より一戦と申こ弱ば
明日出陣より為ケ川と紙さるべー信玄よ押ぞ軍と迫をべくら
ぼと丑車あのく夜まより為ケ川の岸よ陣んで備と厳重よ
信玄自陣ぞうとあーを配りと定めて待ちうーゲ謙信ハを此後
寅の刻ノ岡山とおをくノと紙うくふうとうるおたを手て牛時
とも有を東西十丈里下つく長坂村上の浜うを紙ー山根の村くよ
押うるる武田方小後うくる郷邑と焼掃ひられハ武田方の壮士等大
よ怒り仰陣近く属下の郷邑と放火せるる社安うるぬいるでを
空十て丈物みんや一晩を迫敷さんと罵られべ信玄ハ壮士等ゲ強へ
事を察し強ひ一人も備と強べくらぼ侵を者あべ軍令よ約ぼ
弥厳重小備と立固ひべーと軽の持物荒弛迫く下知と伝へくをば

ぼ雄の壮士等拳と揚り歯と噛りて徒ぼ眼てを怒ろうられ
後勢ち称も二十里ぞう押迫く小布迫を焼を人れ甚甲州の軍
勢輝り為ノく却へ人れべ謙信ち武田が備の勢べうざるをえて
をりても信玄ち呂者あらざるよりて煙りの絶まふ引取られ
べ信玄も謙信が勢作とうて実も山本入道が言ひ如ぼ
後悔の色とぞあー強ぞ多ぼあぼ永禄三年二月上杉謙信お
州小田原く攻入べきよー聞へくられべ小幡氏原大よ弱ぼ甲及飛騨と
弛く武田家の加勢と結をーうべ信玄絶諾あノく初鹿野又郎
青沼助兵衛両人の呂屋大将と拵を来ぼち山ノとも所
勢の勢糸よ如と得く代官の勘定を約ぼられべ小幡が宿老いう程
ぼうやを積べー初鹿ち今年二十七歳ぼられども十六歳の初傳う

甲越 710

数度の誉と聞こえし者なれば小條家の軍之士大将より
小勇の者迄も古不忠剛弱と称又定べし汝両人が勝と名乗し
小條家と弱く係りて敗ぬ同十八日信玄
ち上信の境田峠の内方狭井沢より宿有て
大将上杉憲政が思味と強く上州と退出し小條氏康より従ひ
しが氏康恐れ仁義をそなへて賞罰を糺す故に諸人此人と云ケ
数思ひ謙信西に帰しられば謙信関八州の軍勢於谷十一郡三千
騎人と引率し相州へ押寄る謙信小磯崎沢田村原へ進み陣
ありさるに敵なく雄天へ飛うの如き完繕謙信と云る
小條家と一時へ滅さんと議せられる武威の盛なる国一火の洪
るが如く凡の物と扶ふへ仏られば小條家浮沉此時へありと小條

の諸大将も頭と抱へ恐怖し武田家の諸大将も謙信が軍威へ
強に各評定ありしに狭井沢の方へ伝家兵郎が晴進ら
此度謙信小條家と攻滅さんと事有定氏康滅亡の後へ後州
の今川殿と当家と社さんと議せられ人小田原へ堅固ある
由小田原へ掛甲州より三増峠へ越せ強ひ花水へ出て
関東へ掛る謙信と十数生の合戦と聞へ強て帰べ
頻に小諸へ引れば信玄思為と迎へ強ひ社此十四年謙信と対陣
く其働と云るに小諸へ得勇猛して軍略又孫子が時を要る
名将と云へ武略へ慢ぐ云へ此度関八州の諸将集が武威
へ此れを以て云へ此度へ数西へ引れば諸大将
へ離れんの却く氏康が吉事と有ん山本入道を

仰おそれおそれも只今の不をもつくさんと謙信劉おそれ
関八州の諸侍隨順せざる寺園の数多あり君小田原に諸陣もーは
さは謙信悦んで當年より北関八州の大軍をもて小田原をかこらば
氏康父子色と防ぐ事能はざる故と思べきなり士卒と多く拾ひ集べし然らば沛陣と
當年より攻られ謙信が防ぐ能はざる故と付て一簡の謀計とあらば氏康
もかと無さに當年も干戈と交じて敵と成るべしと
よ仕べしと咲きられば信玄と拍手喝采して悦び給ひ細書にて
山本勘助と物別する間者二十人と撰抜と授け上杉の陣と思
城に入込せ流言しるるを武州忍城を成田下総を憲政の
幕下あるべしと謙信に属するものども実を小田

と内通あるべしと謙信が耳に入るべて成田が
不行と新しく思ひ不果して此法あり速に死ぬせんと思ひ給ふと
耳掛近く守忠江山城を連て今急に車と紀さんと仕給ふ却て
変と生じべしと知る顔よ有る後日の術法を求べしと
中られば両人ご中條右衛門尉
中沒され色よう何とあく成田と疑ひ給ふ忍の城成田が
陣ようて謙信武蔵小田原諸侍と某の如く又下一又人と疑ひ
中ふも成田を後く変化の曲者あれば事ふ有て後代育べき
と内く其用意あるやと流言せーくば忍の留重臣小田原大に騒ぐ成
田が陣ふ来て此事と告るべし成田が陣ようても此法あれば生賞
緩急別当の若あれば成田を好う一段に冷笑ひ謙信に勇あり

とも一個の力とをもつて小條の大敵を討ちべき我と始園人多く従く
こと渠の威と耀せり赤已が勇ふ慢ど人と類ひ軽んど我と
謙せんことふ程事了笑々くれと也と付く何へば甚だ是へーうべ登
類んとて生じる斯く上杉入道鎌倉足利義輝公より大和
兵部少輔神使こて下向あつくれば霞園の八幡宮へ社参有て神
系こて管領職を任ぜらるふ甚威儀厳重ーて右大将家の拾式
を准ぜり国公の諸大将も甚儀式をつくく備も出ーき鎌倉殿
威勢うあさのこ大功もあくーて既ふ関八州の軍勢十二万の主将
となり移ふ定ふ果敵の子捕茅代ーも倒多くーじ此感ー
々ふ中ふも成田下総ふ長泰も従軍ふ候ーどくるが下国鎌倉殿
顔と打守り互ふ目と目と脱と見合るが鎌倉殿ーて

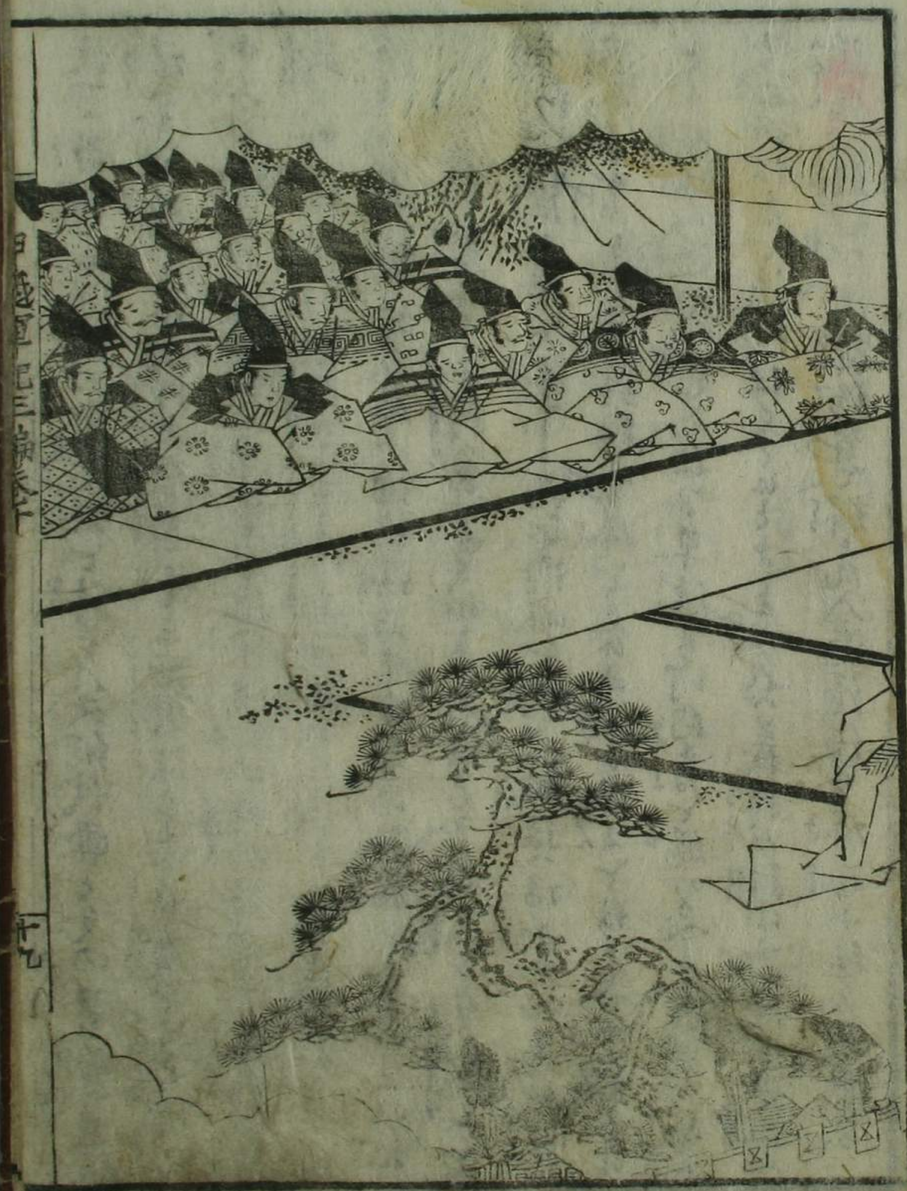
甲越 213

る打もれば鬨と怒ーと喪殺ーて総ふが新勢安程ちくといふく
将軍とどんどふ持こふ成田が面と二ツ近續さふふ打ま
くれば成田も大ふ怒り掘ーて日比人の家遠ーて事ふ出せて我と
強せん結構ふくやと安今の眼色面ふ従くふへ左刀の柄ふと
つけく飛こんとふる成田ふ向て虫江山城守須田大炊助を引ふく
左右より成田と取ふめて動ーせざりければ成田もかふく静ーけ
る須破大事こて出来ふこと管中の強勢斜ふあらざると虫に
山城守事新近江強と制ーー今日ち事ふく事が成田
頓こ為城無城ふ引答竜うくれば見と又こ関八州の大小名我
も〳〵と本国ふ引こ帰こくれば鎌倉殿一万七千騎人
こて上州平井へ引こ移ふ途中小笠弦と多く勝こ武士等ふ

棄つれども、より就後國の住人錦織の次郎上州の小幡尾張守信
定同弟喜助、小長野の野守が奪ひ、大身の者あれば
長野が屬下の屬たりきと計り國書助と心を合せ尾張守
を追出し尾張を奪ひ甲州へ志ひ、ひ繼ぎ甲州へ走りし
と信玄厚く養育して信加大日向守千代の知行と安ら
大日向を佐久郡の南目へ近所あれば南目と斬取り城と
築かれより西上野の國三箇所の城と責討ち武田
勢ひ強ければ今を安中箕輪松井田三ヶ所の外を西上野皆武田
に屬し故に武田の一將勝沼弾正忠信門尉を國奉行に遣はせられ
上杉謙信上洛の事

永禄四年上杉謙信は管領職に任ぜられ、御禮として上洛し足
利將軍義輝卿に拜謁せんと用意有りしが武田信玄が間を奪
て敵國と侵入事を危く二月上旬使を甲州へ遣し謙信上洛有
足利將軍に拜謁あり後に是云の事にて私の妻まあ信
玄上を重んじ強て果ず國へ出張の事と思ひ止
給へり兼引無なれども謙信上洛とお止べしといひ遣りしかれば信
玄養ひ謙信上洛の猶樣神妙の至り武家の樣樂らんと
那よりたびたび國の帝近ちに遣わ綸旨有りしかれば
謙信大に悦び弥出陣奉の行裝善美を盡して上洛ありて
義輝卿に拜謁あり義輝卿大に御悦有り御名の一字を賜ハり
改虎と改めて輝虎と号す（謙信姓名景虎上杉憲政の養子に成り後に政虎と
号し後に御諱と綸旨を賜て輝虎と更名あり）幕府

715
甲越



成田下総守
和厚と
取囲

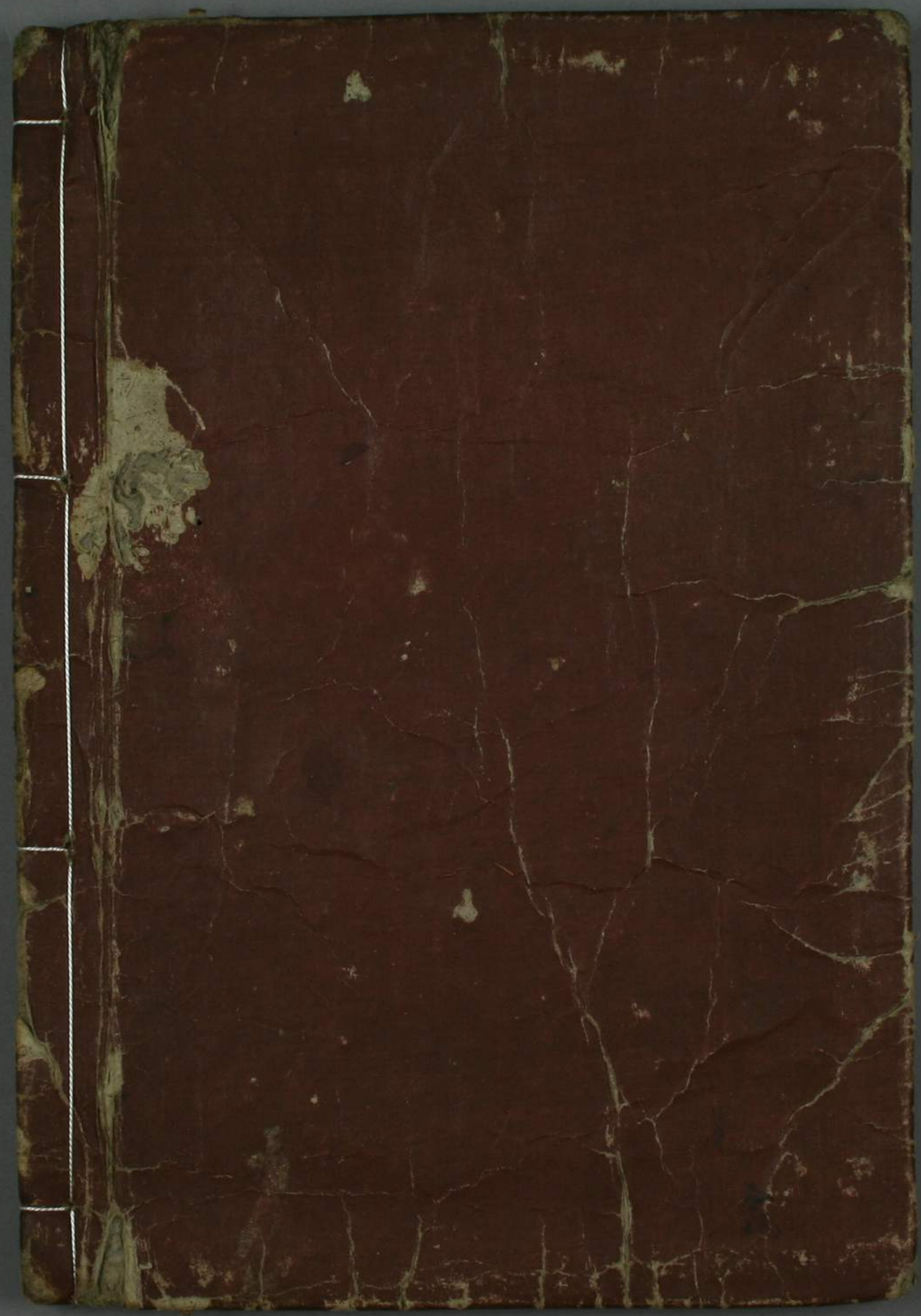
紋一ヨ菊桐二ヨ澤瀉三ヨ瓜の紋と称られ又網代車と文の書きと行
弾あり旗鑓ヨ松永弾正内意ヨて三好繕理ヨ支長慶と称ヨ洛の
中ヨヨ宮せば大洋は止宮あるて洛中洛外の神社仏閣ヨ来うあり
或ヨ宇治南都堺住吉天王寺迄見物あり独ヨ義輝卿と三
好長慶ヨれと絡ひ殺ヨ鎌信滞留中京都の勃輝とヨヨ三ヨ松
永ヒが威と霊あり豆利家と義如ヨヨ公ヨ足利家と
棄ヲと孫ヨ車と奈ふ時ひ御帳と称う就後へ帰国の砌義輝卿へ
密ヨ中上ヨヨ三好松永が体と人ヨ偏ヨ孫ヨと結ヨ者と奈ふ
ヨ渠二人逆心の色ヨ見ひで早速ヨ御内書と称りべ輝虎独上
ヨ三好松永と誅伐仕るべくひとヨ上ヨれば義輝卿ヨ御感あて偏ヨ
鎌信と親ひ空御契約宵て輝虎入道鎌信ヨ帰国ヨ趣ヨ称ひる

上杉勢お州乱入小条攻と武田ヨ上杉事
如説実ヨ武加岩槻の城主ヨ面義濃守入道三ヨヨ鎌信ヨ属ー
ヨ程ヨ小条ヨ攻ヨ民康疾ヨ深ヨ重ヨ重ヨ虚ヨ
と攻ふべくと関東の諸士と諸くひ上杉民部ヨ補佐ヨ改と大将ヨし軍
勢お州坂ヨすで攻寄安房の里見の城ヨ正木大膳亮ヨ小条義ヨ
の千葉ヨ勢ヨ助ヨ竜ヨヨふ佐倉の城と攻勢ー正木ヨ近進ヨ里見ヨ
先ヨ坂倉ヨ隅と一ヨヨあり相州金澤の城と奈ふ其外ヨの城
の咸岡ヨ総守就河越の城ヨ就後上野の軍勢攻寄金沢ヨ
ふば攻ヨれば諸城ヨヨ小田原ヨ急と告接と左ヨ車掃の歯と挽
ぎめくあるー程ヨ小条氏康父子如何ヨせんと弱ヨ氏康深暗ヨ
ヨ紙疾ヨ深ヨ母敏ヨ当ふん車縋ヨ又勢ヨヨ接ヨーめんとヨれば

如か
×敵

本城に歸かし永ド信玄と戰越後に出張あるべかりし間べ解く
引退くべーと一宮隨巴と甲州に送り上杉憲政を岡三郎と姫関東の諸
士我須國と乱妨し既に金澤及び諸城二ケ所と攻落し早ぬ先方の
將又此湖に恐怖し敵に降て害とあれ諸城の守將所我短冊は
と先ぶんぐも某疾に犯とく接よ車に乗れ御出馬有て謙信が
須國と犯し移て當を什勢に退散とべーと先陣へ信玄に一隊
謙信を絶せし上に謙信が上洛の聞に軍と出に事成に方と答へ
給へども氏康に遮く接と永せども信玄義とよりて軍と動ーに移べと
承繼宿に場日向山本に也と止めいうほど氏康接と元移ふ義決く
御玄用らべくに小条殿の御和睦に謙信と約とに
移に時に恐恨弥に武の義利に天下に不義の名と

後日御大志の妨とに弥に信玄に我も左馬ふ有とて西三
度に使者に弓矢の義利と結く不命を絶ひ移に孫も氏康
再三再四仕と弛に條が存亡に武田の接に有るとうあく
執とられば此上に是に及ばとて武蔵甚左衛門尉と先陣に
遣はされる坂入道が方く陣船あり三月十七日甲州とあさち
移に中嶋に着陣あり先に上杉謙信の忠昌信と乱妨
に田切を乱入させ信玄に鍔嶽と巡見ありて
不と鍔が山嶽に竜に強勢の越後勢西に信玄が所に
是に渦させと城戸と和に間に迫に二無三に対て
双方死亡多く甲州勢軍馬と引上る支あらば鍔が嶽に押
けるに此度小田原に出張あるに上杉勢聞く信玄に

断ぶるべくぶび其上謙信上洛の留まるれば早く城後より出ぬて
鍔が山嶽なもりうんと攻めと囲く退れるまぶ氏康父子再び
給し編へ上信玄が出るれ放ありと使を信州より遣りく信玄が
出るれ勇まぶ謝しられる

池清